

## 形容詞・形容動詞の連用形の副詞的用法

——連用修飾語を含む文の基底構造と変形——

中 井 悟

### はじめに

変形文法理論による日本語の研究は数多くあるが、副詞の研究はあまりなされていない。本論文では、日本語の副詞（本論文で副詞と言うと、形容詞・形容動詞の連用形で連用修飾語と呼ばれているもののことである）を研究する。連用修飾語として一括されていたものを分類し、その基底構造の試案をのべてみたい。

多くの言語において、副詞がその形態上、形容詞と密接な関係を有することは注目すべき事実である。ある言語では、副詞は形容詞に何らかの要素を付加することによって派生される。

#### (0.1)

English: quick + ly → quickly

French: précis + ment → précisément (“precise” → “precisely”)

Hungarian: rossz + ul → rosszul (“bad” → “badly”)

Latin: pulcher + ē → pulchrē (“beautiful” → “beautifully”)

又、ある言語では、形容詞と副詞は同形である。

#### (0.2)

Sanskrit: nityam → nityam (“always”)

Russian: xoróšij → xoróšij (“good”)

日本語も例外ではない。日本語では、形容詞・形容動詞の連用形が副詞と

して使われる。

(0.3)

美しい→美しく  
速い→速く  
正確だ→正確に  
静かだ→静かに

こうした事実注目して、Katz と Postal<sup>2</sup> は、副詞 (manner adverb) を (0.4) の規則によって導くことを提案した。

(0.4)

$$\text{in} + \text{Determiner} + \text{Adjective} + \left\{ \begin{array}{l} \text{manner} \\ \text{way} \end{array} \right\} \rightarrow \text{Adjective} + \text{ly}$$

例えば、elegantly は in an elegant manner より導かれる。

この Katz-Postal 説に対して、多くの人々から修正意見がだされており、そのうちの一人、Lakoff は、(0.5)、(0.6) で、b の文は c より派生されると主張した。<sup>3</sup>

(0.5)

- a. The tailor fitted me.
- b. The tailor fitted me carefully.
- c. The tailor was careful in fitting me.

(0.6)

- a. John sharpened knives.
- b. John sharpened knives cautiously.
- c. John was cautious in sharpening knives.

黒田成幸氏は、様態の副詞 manner adverb は述語として使われた形容詞より導くべきだと主張し、

In brief, one may now be able to say that all the ly-adverbs in

question are surface manifestations of predicative adjectives in sentences one degree higher in the deep structure.<sup>4</sup>

(0.7) は, (0.8) より導かれると言う。

(0.7)

John disappeared *elegantly*.

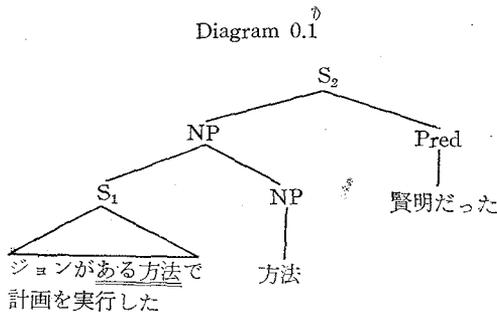
(0.8)

The manner (John disappeared in some manner) was elegant.<sup>5</sup>

日本語の副詞（連用修飾語）の派生についての研究は少ないが、井上和子氏は、黒田氏と同様の提案している。井上氏の説では、Diagram 0.1 が (0.9) の基底構造である。

(0.9)

ジョンは賢明に計画を実行した。



本論文の結論も黒田氏や井上氏と同じである。それは、Higher Verb Analysis と呼ばれている。

## I 結果の副詞と様態の副詞

(1.1=0.9) をもう一度見てみる。(1.1) は、井上氏によれば、三通りに解釈ができるという。(1.2) が paraphrase した文である。

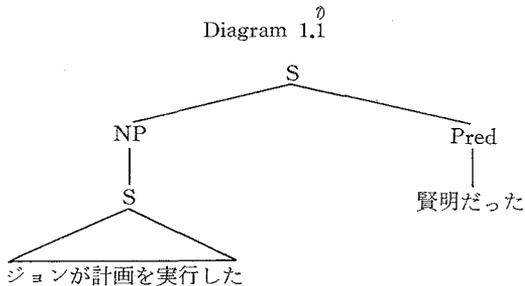
(1.1)

ジョンは賢明に計画を実行した。

(1.2)

- a. ジョンの計画の実行方法が賢明であった。
- b. 計画を実行した点で、ジョンは賢明であった。
- c. ジョンが計画を実行したことが賢明であった。

(1.2b) の構造は、本論文では扱わない。(1.2a) の意味では、「賢明に」は様態副詞 *manner adverb* であり、(1.2c) の「賢明に」は、英語の文副詞 *sentence adverb* に相当する。井上氏は、(1.2a) の意味で (1.1) の基底構造として Diagram 0.1 を、(1.2c) の意味で Diagram 1.1 を提案している。



井上氏は *manner adverb* と *sentence adverb* (1.2b は別にして) しか示していないが、この二つでは不十分である。日本語の形容詞・形容動詞の連用形には、*manner adverb* と *sentence adverb* 以外の用法があるからである。それは「結果の副詞」と呼べるものである。「結果の副詞」とはいかなるものか、それから始めよう。

まず (1.3) と (1.4) を比較してみよう。

(1.3) 私は鉛筆を細くけずった。(1.4) 私は鉛筆を速くけずった。

表面上、(1.3)と(1.4)は同じ文型をしている。主語+目的語+副詞+述語である。しかし、この二つの副詞は全く異なった性質を持っている。意味的に言えば、(1.3)の「細く」は、けずった後の鉛筆の状態、けずるという行為の結果を述べているのであり、(1.4)の「速く」は、私が鉛筆をけずる方法・態度を述べている。従って、(1.3)の「細く」は、「結果の副詞 *adverb of result*」と呼ばれるべきであり、(1.4)の「速く」は、「様態の副詞 *adverb of manner*」と呼ばれるべきである。

これらの意味的なちがいは、*paraphrase* のちがいに反映される。(1.5)と(1.6)を比較してみるとこれが明らかになる。

## (1.5)

- a. 私は鉛筆を細くけずった。
- b. 私は鉛筆をけずった。その結果、鉛筆は細くなった。
- c. \*私の鉛筆のけずり方は細かった。(＊はその文が *unacceptable* であること示す)

## (1.6)

- a. 私は鉛筆を速くけずった。
- b. \*私は鉛筆をけずった。その結果、鉛筆は速くなった。
- c. 私の鉛筆のけずり方は速かった。

結果の副詞を含む文は、(1.5b)のように *paraphrase* できるが、(1.5c)のようにはできない。逆に、様態の副詞を含む文は、(1.6b)のようには *paraphrase* できないが、(1.6c)のようにはできる。次にあげる(1.7)から(1.10)までは *adverb of result* の例であり、(1.11)から(1.13)までは *adverb of manner* の例である。

## (1.7)

- a. 私は壁を白く塗った。
- b. 私は壁を塗った。その結果、壁が白くなった。
- c. \*私の壁の塗り方は白かった。

## (1.8)

- a. 母はケーキをおいしくやいた.
- b. 母はケーキをやいた. その結果, ケーキがおいしくなった.
- c. \*母のケーキのやき方はおいしかった.

## (1.9)

- a. その子は手をきれいに洗った.
- b. その子は手を洗った. その結果, 手がきれいになった.
- c. \*その子の手の洗い方はきれいだった.

## (1.10)

- a. 母はコーラを冷蔵庫で冷たくひやした.
- b. 母はコーラを冷蔵庫でひやした. その結果, コーラは冷たくなつた.
- c. \*母の冷蔵庫でのコーラのひやし方はつめたかった.

## (1.11)

- a. 私はていねいに壁をふいた.
- b. \*私は壁をふいた. その結果, 壁がていねいになった.
- c. 私の壁のふき方はていねいだった.

## (1.12)

- a. その子は静かに氷菓子を食べた.
- b. \*その子は氷菓子を食べた. その結果, 氷菓子が静かになった.
- c. その子の氷菓子の食べ方は静かだった.

## (1.13)

- a. その少年はすばやく車をさけた.
- b. \*その少年は車をさけた. その結果, 車がすばやくなった.
- c. その少年の車のさけ方はすばやかだった.

次の (1.14) から (1.17) も, 二種の副詞のちがいを示す paraphrase である.

(1.14)

- a. 彼は鉛筆を細くけずる。(Result)
- b. \*彼が鉛筆をけずる細さ。

(1.15)

- a. 母はビールを冷たくひやす。(Result)
- b. \*母がビールをひやす冷たさ。

(1.16)

- a. 母は床をていねいにふく。(Manner)
- b. 母が床をふくていねいさ。

(1.17)

- a. 太郎は静かに本を読んでいる。(Manner)
- b. 太郎が本を読んでいる静かさ。

adverb of result と adverb of manner を区別しなければならないもう一つの根拠は、主語・述語の関係である。(1.18)にみられるように、adverb of result は、文の目的語との間に潜在的な主語・述語関係を有し、(1.19)にみられるように、adverb of manner は、文の主語と主語・述語の関係を有している。

(1.18)

- a. 私は鉛筆を細くけずる。  
主 目 副(結) 述
- b. 鉛筆が細い。
- c. \*私が細い。

(1.19)

- a. 私は鉛筆を速くけずる。  
主 目 副(様) 述
- b. \*鉛筆が速い。
- c. 私は(鉛筆のけずり方が)速い。

さらに語順のちがいも result と manner の区別を支持する証拠の一つ

である。日本語は、語順が比較的自由的な言語といわれているが、(1.20)のような傾向があるようである。(これは傾向にすぎず厳格な規則ではない。現に(1.19)では目的語が様態の副詞の前にある)

(1.20)

主語 + Adverb of Manner + 目的語 + Adverb of Result + 述語

従って、(1.21)で、a, c, e は acceptable であるが、b, d は倒置したという感じがし、f は全く unacceptable である。

(1.21)

- a. 彼は鉛筆を細くけ<sup>副</sup>ず<sup>述</sup>った。  
主 目 (結果)
- b. ? 彼は細く鉛筆をけ<sup>目</sup>ず<sup>述</sup>った。  
主 副 (結果)
- c. 彼はていねいに鉛筆をけ<sup>目</sup>ず<sup>述</sup>った。  
主 副 (様態)
- d. ? 彼は鉛筆をていねいにけ<sup>副 (様態)</sup>ず<sup>述</sup>った。  
主 目
- e. 彼はていねいに鉛筆を細くけ<sup>副 (結果)</sup>ず<sup>述</sup>った。  
主 副 (様態) 目
- f. \*彼は細く鉛筆をていねいにけ<sup>副 (様態)</sup>ず<sup>述</sup>った。  
主 副 (結果) 目

以上で形容詞・形容動詞の連用形による連用修飾語は、結果の副詞と様態の副詞に二分すべきことが明らかになったと思う。もちろん、この二つだけでは不十分で、文副詞 *sentence adverb* と呼ばれるものも付け加えるべきである。(1.22)で下線をほどこした語がその例である。

(1.22)

- a. 彼は、間違いなく犯人だ。
- b. 彼は、大人げなく子供をなぐった。
- c. その時、思いがけなく父が帰ってきた。

こうした文副詞は、英語の場合と同様、文頭に置くことができる。

## (1.23)

- a. 間違いなく, 彼は犯人だ.
- b. 大人げなく, 彼は子供をなぐった.
- c. 思いがけなく, その時父が帰ってきた.

そして文副詞は (1.24) のように paraphrase できる.

## (1.24)

- a. 彼が犯人である【のこと】は, 間違いはない.
- b. 彼が子供をなぐった【のこと】は, 大人げなかった.
- c. その時父が帰ってきた【のこと】は, 思いがけなかった.

以上をまとめると, 日本語の副詞 (連用修飾語) は, 次の三つに分類できる.

## (1.25)

- 1. 結果の副詞 Adverb of Result
- 2. 様態の副詞 Adverb of Manner
- 3. 文副詞 Sentence Adverb

もちろん, このいずれにもあてはまらないものもある。「得がたい」, 「縁どおい」などは, 副詞とされない形容詞である.

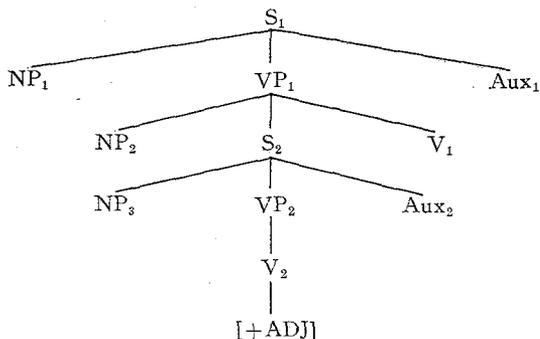
## II 基底構造と変形

意味が異なれば基底構造も異なる. *adverb of result* を含む文の基底構造と *adverb of manner* を含む文の基底構造は異なるはずである. ここでは, 基底構造と変形操作についての一試案をのべてみる.

## 1

「結果の副詞」は VP に埋め込まれた文の述語として出発する. Diagram 2.1 はその図解である.

Diagram 2.1

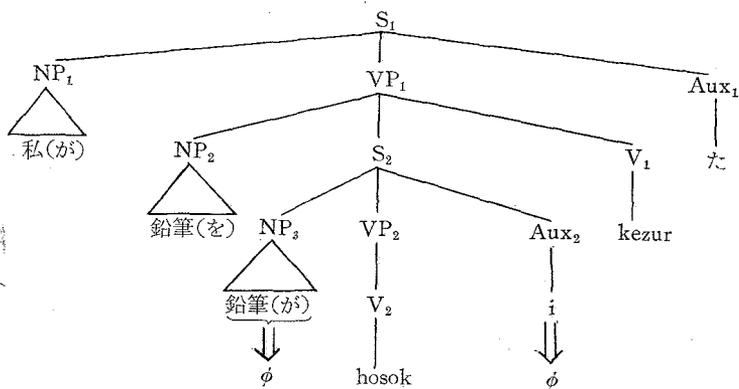


この分析に従えば、(1.3)の基底構造は、Diagram 2.2 のようになる。

(1.3)

私は鉛筆を細くけずった。

Diagram 2.2



NP<sub>3</sub> は同一名詞句消去変形 Identical NP Deletion によって消去され、Aux<sub>2</sub> も Auxiliary 消去変形 Auxiliary Deletion によって消去される。

この分析を動詞句補文分析 VP Complement Analysis と呼ぶことにする。次に、このVP Complement Analysis が他のVP Complement とど

の点で異なるのかを調べる。

次の例は、全て VP Complement と言われているものである。

(2.1)

私は弟に本を読ませた。

(2.2)

私は弟に頭をなぐられた。

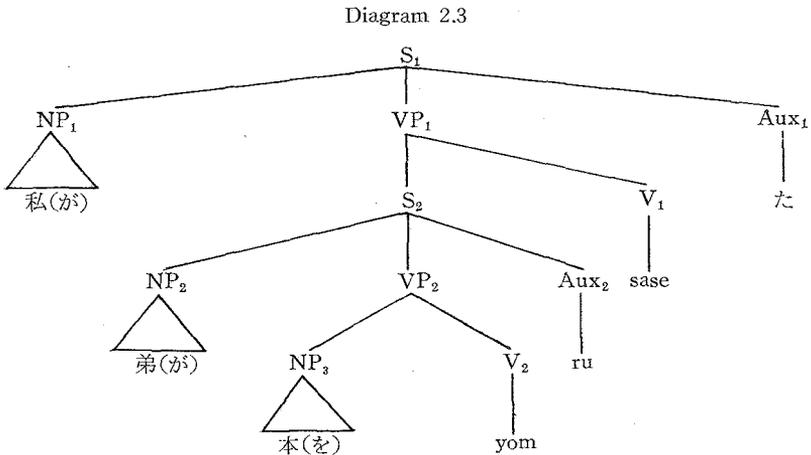
(2.3)

私は水を飲みたい。

(2.4)

私は学校へ行かない。

(2.1) の基底構造は Diagram 2.3 のようになる。<sup>9</sup>



これは result adverb の派生とどの点で異なるのであろうか。

理論上は、主文の述語の種類と埋め込み文の述語の種類によって、次の表のように9通りの組み合わせが考えられる。形容動詞が主文の述語となる場合はきわめて少ないので、(7)、(8)、(9)は対象外とする。

主文の述語	動 詞	形 容 詞	形 容 動 詞
埋め込み文の述語			
動 詞	(1)	(4)	(7)
形 容 詞	(2)	(5)	(8)
形 容 動 詞	(3)	(6)	(9)

(2), (3) [結果の副詞] は, (1), (4), (5), (6)と二つの点で異なる。第一に, (1), (4), (5), (6)では, 主文の述語になる動詞・形容詞の数が限定されているが, (2), (3)では, 主文の述語になれる動詞・形容詞の数が多いということである。(1), (4), (5), (6)では, その動詞・形容詞を数えあげることが可能である。次のものがその代表例である。<sup>9</sup>

(1) rare (受身), sase (使役), (ra)re (可能), sur (を~にする), nar (~になる), age (~してあげる), kure (~してくれる), mi (~してみる), hazime (~しはじめる), das (~しだす), owa, oe (~しおわる, ~しおえる), yam (~しやむ), tagar (~したがる)。

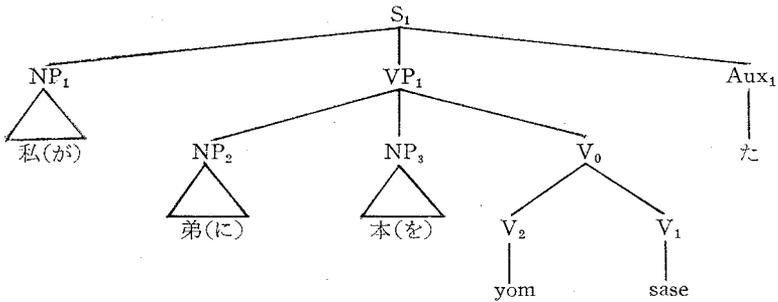
(4) ta (~したい), na (~しない), yasu (~しやすい), niku (~しにくい), hosi (~してほしい)。

(5) na (~しない)

(6) na (~しない)

第二に, (1), (4), (5), (6)の述語は, 全て dependent predicate <sup>10</sup>であるのに, (2), (3)の述語は dependent でないことである。dependent であるとは, その埋め込み文の述語が主文に引きあげられるということである。例で説明する。Diagram 2.3 で Aux<sub>2</sub> が消去され, V<sub>2</sub> が主文へ引きあげられ, V<sub>1</sub> に Chomsky 付加されるのである。表層構造は, 大体次のようになる。

Diagram 2.4



yom と sase は V<sub>0</sub> によって支配されているから分離できない。(2.5) は unacceptable である。

(2.5)

\*私は yom 弟に本を sase た。

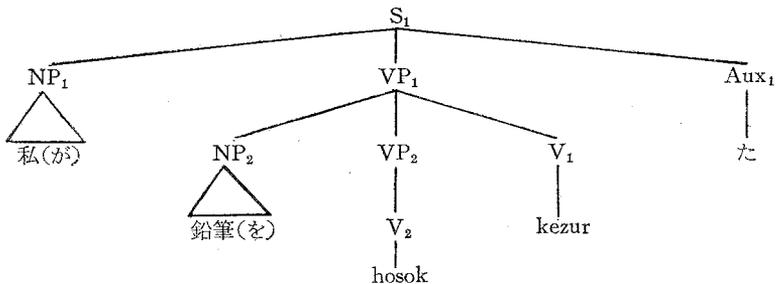
一度 V<sub>2</sub> が引きあげられ V<sub>1</sub> に付加されると、V<sub>2</sub> と V<sub>1</sub> は一つのVのように行動するのである。

この述語の引き上げが result adverb の派生では起らないのである。その証拠に、result adverb は、述語より離し、目的語の前に置くことがで

(2.6)

私は細く鉛筆をけずる。

Diagram 2.5



きる。もし引き上げが起っていれば、hosok は kezur に付加され、kezur から離れないはずである。従って表層構造は Diagram 2.5 のようになる。

以上をまとめると次のようになる。結果の副詞は VP に埋め込まれた文の述語である。埋め込み文の主語は主文の目的語と同一であるので消去され、又 Aux も消去される。ここまでは VP Complement と同じであるが、主文の述語が [-dependent] であるので、述語の引き上げは行なわれない。その証拠に、結果の副詞は主文の述語より引き離し、目的語の前に置くことができる。

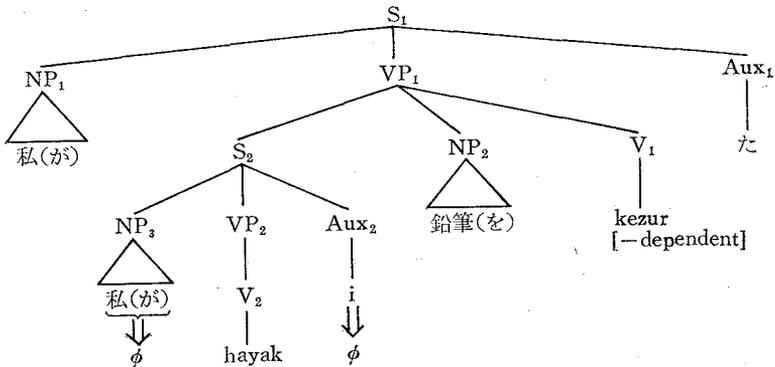
## 2

もし VP Complement Analysis が manner adverb の派生にも適用できるのなら、(1.4) の基底構造は、Diagram 2.6 のようになる。

(1.4)

私は鉛筆を速くけずった。

Diagram 2.6



結果の副詞の場合と同様、NP<sub>3</sub>、Aux<sub>2</sub> は消去される。又、述語の引き上げは起らない。

興味あるのは、NP<sub>3</sub> が主文の主語の NP<sub>1</sub> と同一である故に消去されることである。結果の副詞の場合、NP<sub>3</sub> は主文の目的語の NP<sub>2</sub> と同一で

あった。このことは (1.18) と (1.19) で述べたことと関係する。

しかしながら、この VP Complement Analysis では manner adverb の派生を完全に説明できない。(2.7) の a と b を比較してみるとこれが明らかになる。

(2.7)

- a. 太郎はおとなしく本を読んでいる。
- b. 太郎はおとなしい。

a では、おとなしいのは太郎の本の読み方であり、b では、太郎の性格がおとなしいのである。従って、(2.8) のような表現が可能なのである。

(2.8)

太郎は騒々しい人間だが、人前ではおとなしく話す。

もし (2.8) の「おとなしく」が太郎の性格を述べるのなら、(2.8) は矛盾した内容を言っていることになる。b が a に埋め込まれているとは考えられない。

(2.9) が、さらに、VP Complement Analysis の不適當性を証明する。(2.9) では、埋め込まれた文自体は acceptable だが、文全体は unacceptable という事態が起っている。

(2.9)

- a. 太郎はエッチだ。
- b. \*太郎はエッチに話す。

「エッチだ」というのは、ある人の性格について使われる語であり、決して manner adverb にはならないのである。

さらに反例をあげる。(2.10) は ambiguous である。

(2.10)

SさんはTさんに騒々しくしゃべらせた。

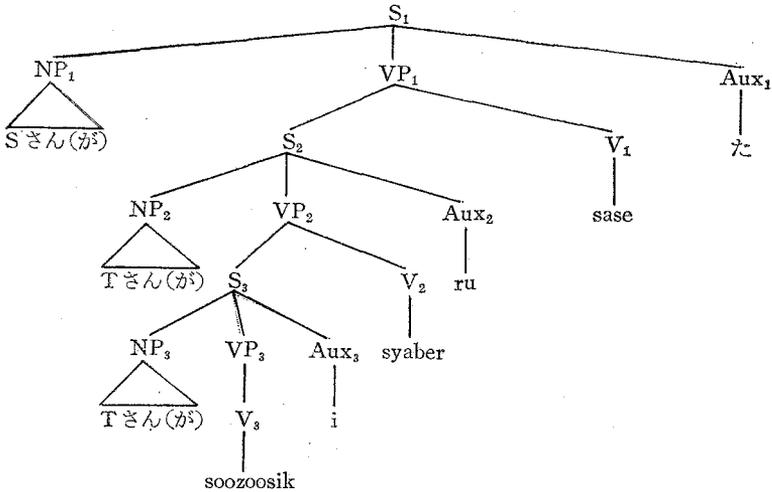
(2.10) は二通りに解釈できる。

(2.11)

- a. Mr. S. noisily made Mr. T. speak.
- b. Mr. S. made Mr. T. [speak noisily].

VP Complement Analysis では (2.11 b) の解釈しか許さない。

Diagram 2.7



(2.11 a) の意味での (2.10) を導けないのである。(2.10) を (2.12 a) と (2.12 b) の 等位接続 *conjoining* で導くことも考えられるが、それも不可能である。

(2.12)

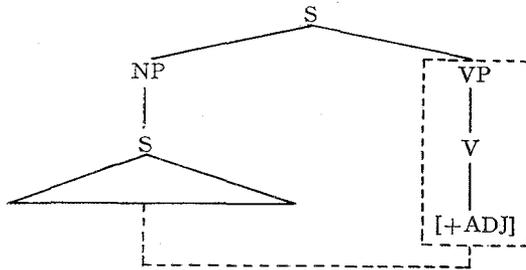
- a. \*Sさんは騒々しくさせた。
- b. SさんはTさんにしゃべらせた。

(2.12 a) 自体が *ungrammatical* である。さらに大切な事は、「騒々しく」が *sase* だけでなく、*syaberasetta* 全体にかかっていると感じられること

である。conjoining ではこのことを説明できない。

以上のような反例を説明するためには、別の方法で manner adverb を派生しなくてはならない。今までに提案されている方法では、Higher Verb Analysis が以上の反例を説明できる。この分析では、manner adverbは、より高次の文の述語として出発し、埋め込み文の中に下降してくるのである。Diagram 2.8 がその図解である。

Diagram 2.8

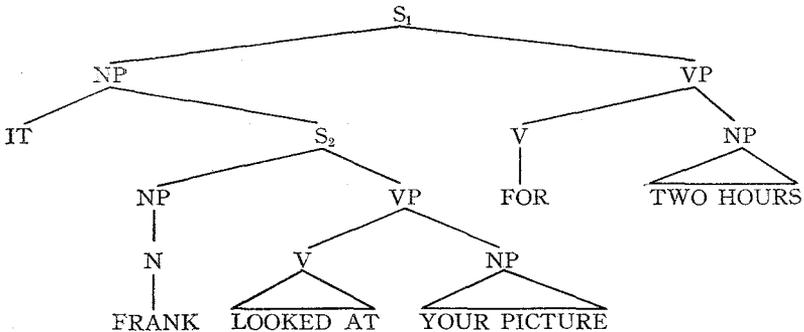


Higher Verb Analysis の実例は J. E. Geis の論文に見られる<sup>10)</sup>。彼女の例の一つ (2.13) は、Diagram 2.9 のような基底構造をもつ。

(2.13)

Frank looked at your picture for two hours.<sup>10)</sup>

Diagram 2.9

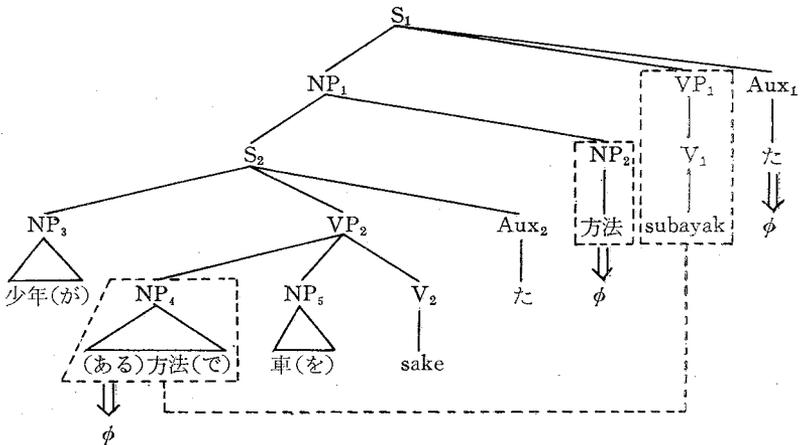


この分析では、(2.14)の基底構造は Diagram 2.10 のようになる。もし関係節形成 Relative Clause Formation Transformation が適用されれば、(2.15)が導かれ、さらに(2.15)は名詞化 Nominalization で(2.16)となる。

(2.14)

その少年はすばやく車をさけた。

Diagram 2.10



(2.15)

その少年が車をさけた方法はすばやかった。

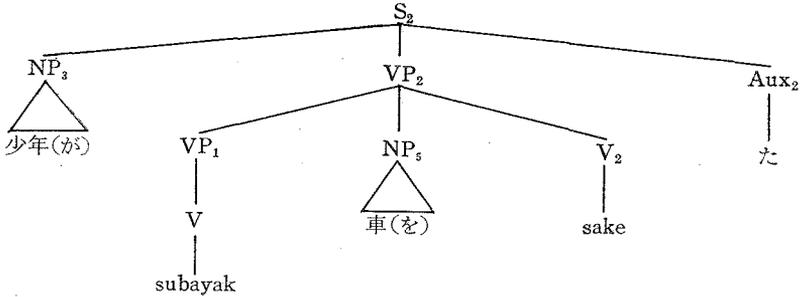
(2.16)

その少年の車のさけ方はすばやかった。

もし関係節変形 Relativization が適用されなければ、副詞形成が行なわれる。まずNP<sub>2</sub>とNP<sub>4</sub>が消去される。次にVP<sub>1</sub>のsubayakがNP<sub>4</sub>が占めていた位置に引き降ろされる。これは述語下降変形 Predicate Lowering Transformation と呼ばれる。表層構造は Diagram 2.11 のよ

うになる。

Diagram 2.11



反例をみていこう。(2.7a) は (2.17) のような基底構造をもつと考えればよい。

(2.17)

[[太郎がある態度で本を読んでいる]<sub>S</sub> 態度が]<sub>NP</sub> おとなしい。

(2.17) の「おとなしい」は、太郎の本の読み方を述べている。この「おとなしい」が引き下げられて副詞となるのであるから、(2.7) で直面した問題は生じない。

(2.9b) の ungrammaticality も Higher Verb Analysis で説明できる。(2.9b) が ungrammaticalなのは、(2.18) が ungrammatical であるからである。

(2.18)

- a. \*太郎が話す方法はエッチだ。
- b. \*太郎の話し方はエッチだ。

(2.10) の ambiguity も Higher Verb Analysis で説明できる。Diagram 2.13 が (2.11 a) の意味を、Diagram 2.14 が (2.11 b) の意味を示す。もし Relativization を Diagram 2.13 に適用すれば、(2.19) となり、

Diagram 2.14 に適用すれば (2.20) となる。

Diagram 2.13

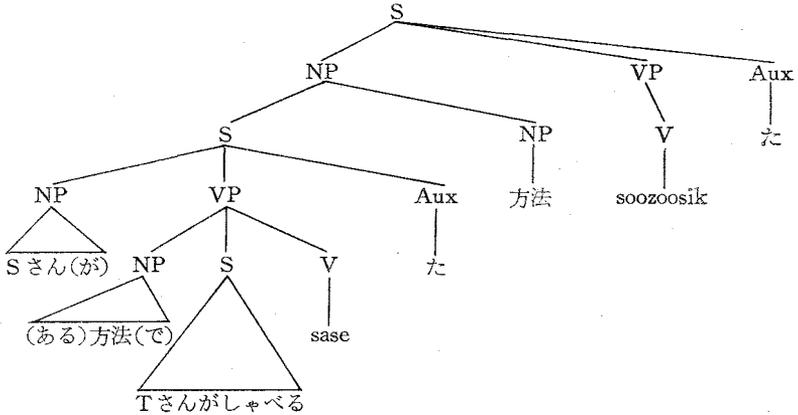
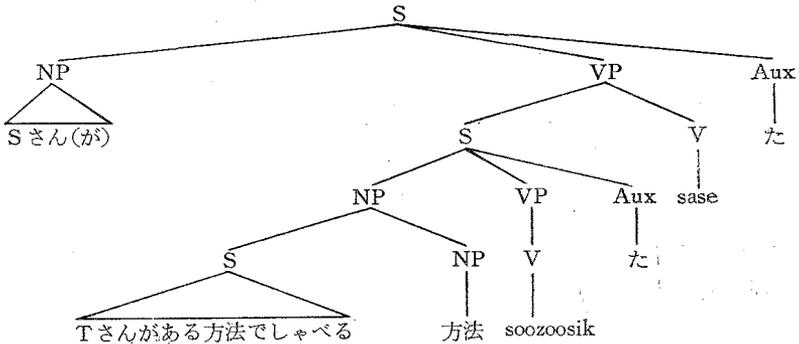


Diagram 2.14



(2.19)

SさんがTさんにしゃべらせた方法は騒々しかった。

(2.20)

SさんはTさんのしゃべり方を騒々しくさせた。

もし Relativization が適用されなければ, Diagram 2.15 と Diagram 2.16

で示される表層構造が得られる。

Diagram 2.15<sup>19)</sup>

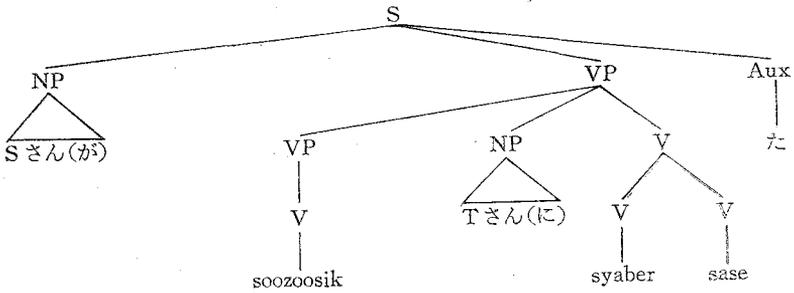
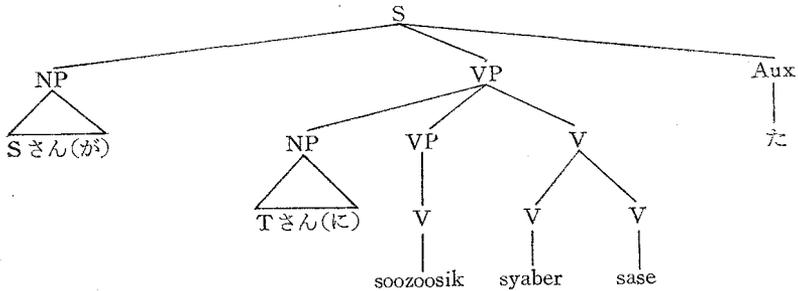


Diagram 2.16



以上見たように、Higher Verb Analysis は、VP Complement Analysis が説明できない例を説明できる。manner adverb の派生の説明としては、Higher Verb Analysis の方が better であることになる。

Higher Verb Analysis で、置き換えられる名詞は「方法」だけではない。manner を示す名詞ならなんでもよい。例えば、次の例では、「手つき」である。

(2.21)

その手品師はあざやかにハトを消した。

(2.21) は, (2.22) のように paraphrase できる.

(2.22)

その手品師はあざやかな手つきでハトを消した.

(2.21) の基底構造は, (2.23) である.

(2.23)

[[その手品師がある手つきでハトを消した]<sub>S</sub>手つきが]<sub>NP</sub>あざやかだった.

もし head noun が「こと」や「の」場合は, 文副詞が得られる. (2.24) の基底構造は (2.25) である.

(2.24)

おもいがけなく父が帰ってきた.

(2.25)

[[父が帰ってきた]<sub>S</sub>の]<sub>NP</sub>思いがけなかった.

ただしこの場合は Relativization は起こらない.

## ま と め

本論文で取扱ったのは, 形容詞・形容動詞の連用形で連用修飾語となっているものを, 結果の副詞・様態の副詞・文副詞の三つに分類し, 結果の副詞を VP Complement から, 様態及び文副詞を Higher Predicate から派生することである.

## 注

- 1) (0.1), (0.2) でラテン語, サンスクリット語, ロシア語の例は, 市河三喜・高津春繁(編), 『世界言語概説』(東京: 研究社, 1969) 上巻より, ハンガリア語の例は, 市河三喜・服部四郎(編)の下巻よりとった.
- 2) Jerrold J. Katz and Paul M. Postal, *An Integrated Theory of Linguistic*

- Descriptions* (Cambridge, Massachusetts: The M. I. T. Press, c 1964), p. 141.
- ③ George Lakoff, *Irregularity in Syntax* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., c 1970), p. 158.
- ④ Sige-Yuki Kuroda, "Some Remarks on English Manner Adverbials," *Studies in General and Oriental Linguistics*, eds. Roman Jakobson and Shigeo Kawamoto (Tokyo: TEC Company, Ltd., 1970), p. 392.
- ⑤ *Ibid.*, p. 394.
- ⑥ 井上和子, 「変形文法と日本語 その 11」『英語教育』Vol. XXI, No. 5, pp.74-8.
- ⑦ *Ibid.*, pp. 77-8. 井上氏の図と同様, 本論文では, 助詞はテーマと直接関係がないので, 全て ( ) でかこんだり, あるいは省略してある.
- ⑧ Cf. Teruhiro Ishiguro, "A Study of Japanese Verb Phrase Embedding Construction," *Doshisha Literature*, No. 25, pp. 65-99.
- ⑨ これらの例は注⑧の論文より借りた.
- ⑩ Cf. 中右実『日本語補文構造論』(東京: 開拓社, c 1973), p. 237.
- ⑪ J. E. Geis, "Some Aspects of Verb Phrase Adverbials in English," (Unpublished Doctoral Dissertation; University of Illinois: 1970).
- ⑫ *Ibid.*, p. 57.
- Diagram 2.9 は prelexical structure である.
- ⑬ Diagram 2.15 で「soozoosik」と「Tさんに」の位置をいれかえると, Diagram 2.15 と Diagram 2.16 は両方とも最終的には同じ (2.10) で示される表層構造となる.